支那の画

芥川龍之介

松樹図

雲林を見たのは唯一つである。その一つは宣統帝の御物、今古奇観と云ふ画帖の中にあつた。画帖の中の画は大部分、薫其昌の旧蔵に係るものらしい。雲林筆と称へる物は、文華殿にも三四幅あつた。しかしその画帖の中の、雄勁な松の図に比べれば、遥かに画品の低いものである。

わたしは梅道人の墨竹を見、黄大癡の山水を見、王叔明の瀑布を見た。（文華殿の瀑布図ではない。陳宝琛氏蔵の瀑布図である）が、気稟の然らしむる所

か頭の下（さが）つた事を云へば、雲林の松に及ぶものはない。松は尖つた岩の中から、真直（まつすぐ）に空へ生え抜いてゐる。その梢（こずゑ）には石英（せきえい）のやうに、角張（かどば）つた雲煙（うんえん）が横（よこた）はつてゐる。画中の景はそれだけである。しかしこの幽絶な世界には、雲林（うんりん）の外（ほか）に行つたものはない。黄大癡（くわうたいち）の如き巨匠さへも此処（ここ）へは足を踏み入れずにしまつた。況（いはん）や明清（みんしん）の画人をやである。

南画は胸中の逸気（いつき）を写せば、他は措（お）いて問はないと云ふが、この墨しか着けない松にも、自然は髣髴（はうふつ）と生きてゐはしないか？　油画（あぶらゑ）は真（しん）を写すと云ふ。しかし自然の光と影とは、一刻も同一と云ふ事は出来ない。

モネの薔薇を真と云ふか、雲林の松を仮と云ふか、所詮は言葉の意味次第ではないか？　わたしはこの図を眺めながら、そんな事も考へた覚えがある。

蓮鷺図

志賀直哉氏の蔵する宋画に、蓮花と鷺とを描いたのがある。南蘋などの蓮の花は、この画よりも所謂写生に近い。花瓣の薄さや葉の光沢は、もつと如実に写してある。しかしこの画の蓮のやうに、空霊澹蕩たる趣はない。

この画の蓮は花でも葉でも、悉（ことごとく）どつしり落ち着いてゐる。殊に蓮の実の如きは、古色を帯びた絹の上に、その実の重さを感ぜしめる程、金属めいた美しさを保つてゐる。鷺（さぎ）も亦（また）唯の鷺ではない。背中の羽根を逆（さかさ）に撫（な）でたら、手の平に羽先（はさき）がこたへさうである。かう云ふ重々しい全体の感じは、近代の画にないばかりではない。大陸の風土に根を下（おろ）した、隣邦の画にのみ見られるものである。

日本の画は勿論（もちろん）支那の画と、親類同士の間がらである。しかしこの粘（ねば）り強さは、古画や南画にも見当らない。日本のはもつと軽みがある。同時に又もつと優し

みがある。八大の魚や新羅の鳥さへ、大雅の巖下に游んだり、蕪村の樹上に棲んだりするには、余りに逞しい気がするではないか？　支那の画は実に思ひの外、日本の画には似てゐないらしい。

鬼趣図

天津の方若氏のコレクションの中に、珍しい金冬心が一幅あつた。これは二尺に一尺程の紙へ、いろいろの化け物を描いたものである。

羅両峰の鬼趣図とか云ふのは、写真版になつたのを

見た事があつた。両峯は冬心の御弟子だから、あの鬼趣図のプロトタイプも、こんな所にあるのかも知れない。両峯の化け物は写真版によると、妙に無気味な所があつた。冬心のはさう云ふ妖気はない、その代りどれも可愛げがある。こんな化け物がゐるとすれば、夜色も昼よりは明るいであらう。わたしは蕭々たる樹木の間に、彼等の群つたのを眺めながら、化け物も莫迦には出来ないと思つた。

　何とか云ふ独逸出来の本に、化け物の画ばかり集めたのがある。その本の中の化け物などは、大抵見世物の看板に過ぎない。まづ上乗と思ふものでも何か妙に

自然を欠いた、病的な感じを伴(ともな)つてゐる。冬心の化け物にそれがないのは、立ち場の違つてゐる為のみではない。出家庵粥飯僧(しゆつけあんしゆくはんそう) の眼はもう少し遠方を見てゐたのである。

古怪な寒山拾得(かんざんじつとく)の顔に、「霊魂(れいこん)の微笑」を見たものは、岸田劉生(きしだりうせい)氏だつたかと思ふ。もしその「霊魂の微笑」の蔭に、多少の悪戯(あくぎ)を点じたとすれば、それは冬心の化け物である。この水墨の薄明(うすあか)りの中に、或は泣き、或は笑ふ、愛すべき異類異形(いるゐいぎよう)である。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。